國學院大學学術情報リポジトリ

春町作黄表紙の成立考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2023-04-15 キーワード (Ja): 黄表紙, 恋川春町, 其昔龍神噂, 悪抜正直曽我, 鱗形屋孫兵衛 キーワード (En): 作成者: 中村,正明, Nakamura,Masaaki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000147

春町作黄表紙の成立考

中村正明

はじめに

恋川春町は安永四（一七七五）年から寛政元（一七八九）年の間に、計三十二作品の黄表紙を刊行した。それらは、署名を有するものが二十七作品（便宜的に黄表紙体裁小噺本『春遊機嫌話』を含めている）、無署名なるも絵柄や字癖などにより春町作と認定されるもの五作品とに分けられる。また、春町没後の寛政十（一七九九）年には「故人恋川春町遺稿」と記された『須臾之間方』が刊行されているが、春町の作風とは明らかに異なるため、これまで別人作との評価がされてきている。そこで当該作の真偽は爾後の考察を俟つことにして、本論文では省いておくことにしたい。

著名な黄表紙作者の中では、春町の著作数は決して多い方ではないかもしれない。しかし、朋誠堂喜三二とともに、常に黄表紙界の牽引者としての自覚を持って春町は意欲的な趣向の作品を世に出し続けた[1]。それらの作品譜を以下に挙げたい。

安永四（一七七五）年

○『春遊機嫌話（はるあそびきげんばなし）』（鱗形屋孫兵衛）

○『金々先生栄花夢』（鱗形屋孫兵衛）

安永五（一七七六）年

○『高慢斎行脚日記』（鱗形屋孫兵衛）

○『うどんばけものおほえやま そば化物大江山』（鱗形屋孫兵衛）

○『唐倭画伝鑑』（鱗形屋孫兵衛）

○『古今そのへんほうけものばなし 名筆其返報怪談』（鱗形屋孫兵衛）

安永六（一七七七）年

○『三升増鱗祖』（鱗形屋孫兵衛）

安永七（一七七八）年

○『三幅対紫曾我』（鱗形屋孫兵衛）

○『辞闘戦新根』（鱗形屋孫兵衛）

○『芋太郎屁日記咄』（鱗形屋孫兵衛）

○『間違曲輪遊』（鱗形屋孫兵衛）

安永八（一七七九）年

○『妖怪仕内評判記』（無署名・鱗形屋孫兵衛）

○『腹京師食物合戦』（無署名・鱗形屋孫兵衛）

○『甚三紅絹由来』（無署名・鱗形屋孫兵衛）

安永九（一七八〇）年

○『金々先生後日夢』不物好持たが病』（無署名、但し本文中に春町との言及あり・蔦屋重三郎か）

天明元（一七八一）年

○『無題記』（無署名・蔦屋重三郎か）

天明二（一七八二）年

○『跡を老松われたのむとのまこと 東へ飛梅我頼人正直』（蔦屋重三郎）

○『何処の紺屋ひながたいきまなつら で染たやら雛形意気真顔』（蔦屋重三郎）

天明三（一七八三）年

○『悪抜正直曾我』（鱗形屋孫兵衛）

○『金山寺大黒伝記』（鱗形屋孫兵衛）

○『廓さとのばかむらむだじづくし 愚費字尽』（蔦屋重三郎）

○『浦島が帰郷さるかにとをいむかしばなし 八島の入水猿蟹遠昔噺』（蔦屋重三郎）

○『通言神代巻』（鱗形屋孫兵衛）

○『宝船福正夢』（鱗形屋孫兵衛）

○『節季夜行』（鱗形屋孫兵衛）

天明四（一七八四）年

○『吉備能日本智恵』（鶴屋喜右衛門）

○『吉原大通会』（岩戸屋源八）

○『其昔龍神噂』（鱗形屋孫兵衛）

○『夫ハ本歌萬載集著微来歴 是ハ狂歌』（蔦屋重三郎）

天明五（一七八五）年

○『大通箱入之疳癪』（未刊行）

天明八（一七八八）年

○『悦鼻肩蝦夷押領』（蔦屋重三郎）

○『鎌倉太平序』（鱗形屋孫兵衛）

寛政元（一七八九）年

○『鸚鵡返文武二道』（蔦屋重三郎）

寛政十（一七九八）年

○『須臾之間方』（遺稿・蔦屋重三郎）

右一覧を見ると、十四年間にわたる活動期間において二度の活動空白期間を確認することができよう。安永八～九年と天明五～七年である。それぞれの活動休止の明確な理由を示す史料や文章を見出だすことはできないが、前者は鱗形屋孫兵衛の出版活動休止と軌を一にしたものでありその影響と言われている。[2] また、後者にはいまだ有力な説は提示されていない。そして、それらに関連して幾つかの文学史上の謎を遺している。ひとつは無署名作品の存在、もうひとつは成立・刊年不明作品の存在であり、これらは多分に相互関係的な問題である。

本稿は、特に春町作黄表紙のうち、刊行時期が不明であったり、成立に問題が認められる作品について、情報を整理して考察していくものである。

一、春町作品成立・刊行に関する先行研究

（1）無署名作品について

まずは、これまでに多くの研究者たちにより考察・指摘されてきた情報について、簡便に集約・整理をして提示しておくことにしたい。

春町の無署名作品については一覧にも附記したが、春町独特の個性的な絵柄（人物造型・顔立ちなど）を有するとともに、やはり個性的なまるまるとした字癖の見られるものとして古くから春町作品と認定されているものが殆どである。[3] 具体的には以下の五作品が挙げられる。

○『妖怪仕内評判記』

○『腹京師食物合戦』

○『甚三紅絹由来』

○『不物好持たが病』

○『無題記』

はじめの三作品は板元の商標が不自然に削られるとともに、あからさまに作者署名も削られている。これは先にも述べたように鱗形屋の瓦解に伴う処置であったろうことは先賢の指摘す

るところである。古くから書目年表類においてすでにこれらは春町作品と批定されている。[4] 後の二作品は事情が異なり、鱗形屋の休業に併せるように自作黄表紙の刊行を止めていた春町が、別板元（蔦屋重三郎と推定）に請われて袋入本として上梓した作品と推定される。無署名の理由は、休業中の鱗形屋に斟酌した結果と考えられる。[5]

(2)『春遊機嫌話』・『金々先生栄花夢』の刊行時期

続いて、成立・刊年不明作品について。

黄表紙の刊年を確定する証左となる絵題簽の存在から多くの春町作品は刊年が判明しているが、特殊な絵題簽が貼付されていたり、絵題簽の剥落・有無などにより刊年不明の諸作も残存している。また袋入本として刊行された場合は最初から絵題簽がなく、作中に刊年を指し示す要素がない限り成立・刊年を確定することが難しい。そこで、作品を詳細に調査すること、諸要素を丹念に検討することにより、幾つかの作品について成立・刊年を確定することができた。

以下、春町作品のうち、成立・刊年を検討した数作品に絞って見ていくことにする。まずは彼の黄表紙初作である『金々先生栄花夢』の刊行時期について見ることにしたい。

長らく定説がないままであった安永四年の春町の二作品『春遊機嫌話』と『金々先生栄花夢』の刊行の先後について、先年、拙稿「『春遊機嫌話』序文をめぐって　—『金々先生栄花夢』との関わり—」[6] において私見を述べた。詳細はそちらに譲るとして、ここではその要諦のみを紹介することにして、春町作品の成立時期に関する一考察の前置きとしたい。詳細は右拙稿を参照されたい。

従来、安永四年に刊行された黄表紙体裁噺本『春遊機嫌話』と黄表紙『金々先生栄花夢』との関係について、その刊行の先後に注目が集まっていた。それらをまとめてみると、

①『金々先生』正月刊行・『春遊』後時刊行説（浜田義一郎）[7]

②『金々先生』・『春遊』正月同時刊行説（宮永啓子）[8]

③『金々先生』夏・秋刊行説（浜田義一郎・再）[9]

これらの先行研究を踏まえたうえで、私は（3）浜田再説を推すとともに『春遊』正月刊行説を加えた。浜田再説は、何より国会本『半日閑話』安永五年正月記事の南畝自身による欄外書き込み「去年夏か秋の頃絵草紙二冊出る。金々先生栄花夢と云名也。此絵草紙より風を変ず。」を根拠としており、春町と同時代の南畝の言葉が明確な証左と成り得ている。それを裏付けるため、『金々先生』巻末に附された「未正月新版目録」（十

ウ）に注目し、そこに列挙された書目のうち現存する十三作品の諸本には当該新版目録が全く附されていないことを確認した。そこから、安永四年正月刊行の諸作よりも『金々先生』の刊行が遅れたものであり、同年中の鱗形屋刊行作を書目としてまとめる形で、『金々先生』に新版目録が附けられたのではないかと推測した。

また『春遊機嫌話』は、外題中に「春遊」という正月を表わす言葉が入っていること、収録された全十話のうち七話が正月の庶民の年中行事をモチーフとした小噺であることと、春町自身による序文に「此春（このはる）のなくさみと此一冊を頓考（ずいあんじ）の頓写（ずいがき）と書かけぬ」（上ノ一オ）とあり、巻末の鱗形屋口上に「安永四歳未正月」（下ノ五ウ）と記していることを素直に受け入れて、正月刊行であるとした。

つまり、安永四年正月『春遊機嫌話』刊行、同年夏・秋頃『金々先生栄花夢』刊行ということである。そのうえで拙稿においては二作品の関係性を更に考察したが、ここでは省くことにしたい。

(3)『不物好持たが病』・『無題記』の刊行時期

ここでは、『不物好持たが病』と『無題記』について、すでにこれまで示されてきた刊行時期に関する諸説を記すが、いずれも『黄表紙総覧』に簡にして要を得た考察があるので、それを引く形にとどめておきたい。

まずは『不物好持たが病』について。本書は袋入本体裁で刊行されたため、当初から絵題簽は貼付されていないわけであるが、作中にも刊年を明示する要素は見当たらない。かかる本作品の刊年として、安永八年、同九年、天明元年の三説が提示されてきた。[10] 棚橋氏は『黄表紙総覧』において安永九年の条に収めたうえで、三説を簡便に紹介している。その論拠は、園田豊氏の述べた「一丁オモテの挿絵が蔵の中の千両箱に白鼠を描いたものであることから安永九年子歳の刊行」である点としている。また安永九年には蔦屋重三郎から幾つもの袋入本が刊行されていることから、本作もそれらと同類と考えられることを補っている。[11]

次に『無題記』について。従来諸年表類において安永八年の条に掲載されてきたため、その刊年には別説はなかったが、浜田義一郎が日本古典文学全集『黄表紙 川柳 狂歌』解題で天明元年説を提示した。[12] その根拠は「天明二年刊行の京伝の『御存商売物』に天明元年刊行の黄表紙・洒落本と並んで本書の評が載るところから、従来の安永八年説より遅れて天明元年の刊行ではなかったか」としている。また、宇田敏彦氏が述べる画風

の変遷から推して天明元年刊行とする説も援用している。[13] これらを否定する新たな説はその後出ていない。

これらの蔦屋刊行作とされる二作は、安永九年に『不物好持たが病』、天明元年に『無題記』と、段階的に出版されていったと考えられているわけである。

以下の二節では、これまで指摘はあったものの詳細が記されることのなかった『其昔龍神噂』と、成立時期に関してほぼ言及のなかった『悪抜正直曾我』の二作品について、解題も併せて具体的に詳説を試みたい。

二、『其昔龍神噂』の成立時期

『其昔龍神噂（そのむかしりうじんはなし）』は、天明四（一七八四）年に鱗形屋孫兵衛から二巻二冊で板行された作品である。東京都立中央図書館加賀文庫所蔵本に遺る絵題簽は、天明四年鱗形屋の統一意匠（干支の龍の絵を背景として長方形の中に挿絵）であり、当年に刊行されたことは明白である。

本作品の影印・翻刻については、拙稿「黄表紙『其昔龍神噂』翻刻と注釈」に備わるので参照されたい。[14] 以下の論も右資料解題の一部を改稿したものであることを附記しておく。

梗概は以下の通りである。

都で金貸しを営む座頭瀬戸都は、近所の四国屋武兵衛に大金を貸していたが、ある時武兵衛の誘いで嶋原遊廓に遊び、松田屋の女郎加茂川と馴染む。加茂川に上りつめた瀬戸都はたちまち揚代がかさみ、武兵衛に金を返済するように言うが逃げられてしまう。途方に暮れた瀬戸都の許に旅僧が訪れ食事をもてなしたところ、僧は瀬戸都を助けるという。僧は琵琶湖の水神で、龍王の息子が新龍宮遊廓の女郎乙姫に馴染み、父龍王の勘気を蒙ったので救ってほしいという。瀬戸都と水神は琵琶湖に向かう。新龍宮では息子龍王が乙姫と密会しているが、その様子を、乙姫に心をかける百足が見ている。揚屋に揚代を催促される息子を百足が助けるが、その夜登楼した百足は乙姫に迫る。止めに入った息子は、逆に縛り上げられ庭に出されてしまう。そこに天上の湖面から瀬戸都が金を降らせる。息子に加勢した瀬戸都と水神は、百足に唾を吐きかけて退治する。一同は父龍王に詫びを入れる。都に戻った瀬戸都は父龍王の教えに従って金貸しに励み、大金持ちとなって栄えた。

本作品は、座頭金を営む瀬戸都を主人公にして、彼が嶋原の遊女加茂川にはまり金に苦しむ話と、龍神の息子が新龍宮の遊女乙姫にはまる話を結び付けて綴られる。そのうちに、浄瑠璃

『ひらかな盛衰記』の梅が枝の挿話や昔話「猿の生胆（海月骨なし）」、当世の流行、巷談巷説などを織り交ぜていく。

作品の核となる世界については、すでに鈴木暢幸が次のように指摘している。

……安永四年に吉原の遊女松葉屋瀬川が鳥山検校といふ金貸座頭に請出された事件を当て込んだ作で、洒落本の『当世虎之巻』（安永七年刊）と同じ事件を脚色したものである。（中略）所謂際物黄表紙の一例として見るべきものがある。[15]

主人公の瀬戸都と遊女加茂川にはモデルとして、安永期の江戸に実在し、名の知られた鳥山検校と新吉原の遊女瀬川を批定しているのである。同様の指摘は、森銑三『黄表紙解題』[16]と水野稔『古典文庫　黄表紙集Ⅰ』[17]の解題にも見られる。

それでは、鳥山検校と瀬川はなぜ有名になったのであろうか。

鳥山検校は座頭金を営み、江戸市中で権勢を振るった当道の者であった。『明和誌』には「…此頃瀬戸物町に住居して鳥山検校といふものあり、手びろく高利貸をかし、至ての富豪なり」と記されている。[18]その奢侈のほどは、『過眼録』に「一、家財の外、有金廿両、貸金一万五千両、所持の町屋敷一ヶ所」と記録されている。[19]鳥山検校に限らず贅沢に耽った座頭・勾当らは数多く、彼らの行いは遊廓での遊興にも及び、「…都て壹両年已来検校勾当のくつわやにあそぶ事平日の様に成、公然として人の目を憚らず、松の内、五節句、月見等まで、おほかたは座頭の客人なりといひあへり」（『譚海』巻二）というまでになった。[20]そんな中でひと際注目を集めたのが鳥山検校であった。というのは、安永四年に新吉原江戸町一丁目の大店松葉屋の遊女瀬川を数千両で身請けしたからである。大田南畝『半日閑話』巻十三、安永四年の記事には「…又吉原松葉屋瀬川といへる妓を鳥山検校うけ出せしといふ事当年の是沙汰なり」と記されており、[21]『譚海』巻二にも「鳥山検校と云もの、遊女瀬川といふを受出し、家宅等の侈りも過分至極せる…」とある。大層評判になった高利貸しの検校による人気遊女の身請けに加えて、安永七年には更に大事件が起こった。座頭金による大きな借金を抱えた旗本が夜逃げをして、後に不当な高利貸しの実態が露顕したのである。その経緯は、『過眼録』及び中山太郎『日本盲人史』[22]に詳しいのでそちらに譲るが、この事件がきっかけとなって鳥山を含めて十名を遥かに超える検校・勾当らが検挙、入牢されたのだった。

事件が大きく世評に上ると、すぐにこの騒動に取材した景物的戯作が発売された。その先駆けとなったのは、田螺金魚作洒落本『契情買虎之巻』（安永七年刊）で、事件と同年中の刊行

であった。当該洒落本は評判が良く、その後何度も版を重ねた。また、安永七年中には歌舞伎芝居にも取り入れられている。『歌舞伎年表』には、当年正月中村座『國色和曽我』の記事のうちに「…二番目、「二人与作」へ「鳥山検校瀬川」を仕くむ。此狂言中検校処刑ゆゑ、別て大入」と記されており、江戸市中の大事件として喧伝されたことが理解できるだろう（なお、『歌舞伎年表』安永七年の記事中には「鳥山検校瀬川事件」が詳述されている）[23]。

これら以外にも数多くの鳥山瀬川をモデルにした戯作が蔟生されていった。

・黄表紙　作者不明『吉原語晦日月』（安永七年刊）
・黄表紙　伊庭可笑『姉二十一妹恋聟』（安永八年刊）
・黄表紙　市場通笑『盲仙人目明仙人』（安永八年刊）
・黄表紙　山旭亭真婆行『鳳凰染五三桐山』（享和四年刊）
・合　巻　柳亭種彦『千瀬川一代記』（文政二年刊）
・合　巻　市川三升『ぬしや誰問白藤』（文政十一年刊）

高木元氏は「鳥山瀬川の後日譚」において、同時代のトピックスが一つの文学的モチーフとして定着していったことを述べ、瀬川のその後を描く後日譚として作られた戯作群についても言及、詳述している[24]。

・黄表紙　十返舎一九『桐山五三編　後編跡着衣装』（享和四年刊）
・黄表紙　十返舎一九『山三編　操染心雛形』（文化二年刊）
・人情本　為永春水『当世虎之巻後編』（文政九年刊）

さて、話が作品世界の掘り下げにそれてしまったようであるが、実はこの作品世界そのものが本作の成立時期と密接に結びついている。

『其昔龍神噂』もまた鳥山瀬川を題材に採った作品であるとすると、刊行が天明四年であることは、はなはだ不信である。というのは、安永四年の瀬川の落籍、安永七年の鳥山検校の検挙というトピックスからいささか時間が経っているからである。例えば、先に挙げた鳥山瀬川ものの『契情買虎之巻』も『吉原語晦日月』も事件が起きた同年、安永七年中に際物戯作として出版されており、やや遅れた『姉二十一妹恋聟』、『盲仙人目明仙人』でさえ翌八年の刊行であった。その後かなりの年月を経て、黄表紙末期から合巻期にそのモチーフが復活したことは確認されるが、その間の天明・寛政期には全く鳥山瀬川ものは全く見られないのである。その空白期に本作が刊行されていることには大きな違和感を覚えずにはいられない。

実はこの問題は、すでに宮永啓子[25]や井上隆明[26]らも指摘しており、水野稔は『古典文庫　黄表紙集Ⅰ』解題において考察を加

えている。またそれらを踏まえて、棚橋正博は『黄表紙総覧前編』において情報を整理している。そこで、先年注釈を施すにあたり調査したこと、追認したことなどを合わせて、改めて作中の鳥山瀬川以外のトピックスなどを整理して、それら諸要素を検討してみたい。

まず、一点目。作中四丁表の場面に注目してみる。瀬戸都が一宿一飯を振る舞った旅僧が、実は琵琶湖の水神であったという挿話がある。これは、水野の指摘に拠ると、安永五年秋に人びとの口の端に上った巷説が基になっているとする。確かに大田南畝『半日閑話』安永五年の条[27]に「九月、此節水海神の訛言有」として、以下のように綴られている。

京三条通旅籠屋に大なる僧壱人来て、米弐升炊せて食ひ出行。主人不思議におもひ跡より付て行を見て振返り、われは水海神なり、今年より疫病はやるべく、わが此はなしを聞もの幸にまぬかるべく、四分六分とて六分は生き四分は死すべしとなり。

春町もこの流言飛語を聞き知り、作中の一挿話に仕立てたわけである。のみならず、ここの見える「四分六分」の語は本作のキーワードとして、あるいは当初の外題に採られたらしい主題的なことばとして、座頭金の高利と絡めた掛詞となっており、もしかすると本作品の発想の基になっているとも考えられよう。ともあれ、これを際物的なトピックスへの当て込みとするならば、やはり本作は安永五年頃に執筆されていてしかるべきと考える。

二点目は、六丁表と九丁裏に言及される歌舞伎役者についてのトピックスである。

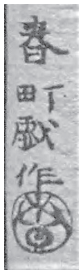
・おれが心にしたがひなさると、まずはるきやうげんの中車がしうちをうち御簾で見せやす（六丁表）

・小佐川がにせごぜのやうに、目があいて見たい（九丁裏）

それぞれ安永期に活躍していた歌舞伎役者である市川中車（二代目市川八百蔵、中車は俳号）と二代目小佐川常世の取り込みである。義太夫語りから歌舞伎界に入った二代目市川八百蔵は立役として人気を獲得し、役者評判記『役者男風流』（安永五年刊）と『役者世鳳凰』（安永六年刊）でそれぞれ立役の上々吉に位付けされている。ところが、安永六年七月三日に四十三歳で病死している。作中にて言及される春狂言は、安永五年正月市村座『冠言葉曾我由縁（かぶりことばそがのゆかり）』の鬼王団三郎役か、安永六年正月市村座『常磐春羽衣曾我（つきせぬはるはころもそが）』の阿漕平次実は梶原と梅由兵衛役を指すものと考えられる。二代目小佐川常世は当時人気の女形の一人で、『役者世鳳凰』（安永六年刊）では若女形上々十と評さ

れている。作中の「にせごぜ（贋瞽女）」は常世が演じた役柄と考えられるが、詳細は不明。あるいは、安永六年五月、江戸市村座で『奥州安達原』が上演され、盲目になる女性袖萩を常世が演じているので、実際には盲目ではない役者が盲目役を演じたことを〝贋瞽女〟と表現したのかもしれない。いずれも具体的な上演に対する当て込みを批定し得ないが、八百蔵の逝去の時期を考え合わせると、その前後に『其昔龍神噂』が作られたことは間違いないのではないか。

三点目として、本作の春町署名に附された印記に注目したい【図版一】。これは宮永啓子も指摘している[28]が、本作の印記は安永七年に刊行された春町作品のそれとほぼ同じものであると言えよう。実際に『芋太郎屁日記咄』【図版二】、『間違曲輪遊』【図版三】の印記と比較検証してみると、細かな差異こそあれ、春町の「春」という文字の篆書を図案化したものとして近似している。『三幅対紫曾我』【図版四】では印記そのものは異なるデザインだが、最終丁の春町自画像の背中に同様の印が描かれているのを見て取ることができる。井上隆明も、本作を「絵柄や印記のかたちからしておそらく安永七年ごろの作になろう」と指摘している。してみれば、『其昔龍神噂』の成立は安永七年前後と考えていいのではないか[29]。


【図版一『其昔龍神噂』】

【図版三『間違曲輪遊』】

【図版二『芋太郎屁日記咄』】

【図版四『三幅対紫曾我』】

作品世界としての鳥山瀬川、琵琶湖の水神に関する巷説、市川中車・小佐川常世の取り込み、春町署名の印記といった幾つもの安永五～七年を指し示すトピックスが確認されることを勘案すると、それらが本作の成立年時を明示していると考えるのが妥当である。『其昔龍神噂』の成立は安永六～七年頃と考え

てよいだろう。

それでは、安永六～七年頃に成立した本作が、なぜ天明四年になって刊行されたのだろうか。宮永氏は、右論文において、安永七年頃に一度刊行されたものが天明四年に再板されたと記すが、初板本の存在は確認されていない。また、棚橋正博氏は、『黄表紙総覧　前篇』において、安永七年頃に起こった板元鱗形屋孫兵衛の瓦解の影響であろうと説く[30]。そのため、すでに執筆を終えていた本作は刊行されずに終わったということである。春町自身の黄表紙執筆休業期間を考え合わせてみても、この説に説得力があるだろう。

これらを考え合わせてみると、外題『其昔龍神噂』と本作の柱刻「四分ろく分」の差異の事情も見えてくる。通常多くの作品は、外題そのままかその一部を柱刻にしている。それは板木彫刻時や摺りの段階で別作品と間違えたり紛れたりすることのないよう、便宜的に揃えるのである。安永七年頃に刊行予定であった折に予定していた外題には、柱刻にある「四分ろく分」という言葉が入っていたものと想像される。それが天明四年刊行時に新たな外題が付け直されたのだろう。すでに数年前のトピックスになってしまった題材であるため、「其昔」と付けたものと推測される。

三、『悪抜正直曾我』の成立時期

『悪抜正直曾我』は、天明三（一七八三）年に鱗形屋孫兵衛から三巻三冊で板行された作品である。東京都立中央図書館加賀文庫所蔵本に遺る絵題簽は、天明三年鱗形屋の統一意匠（上部に作中場面の挿絵・下部に文机と干支の兎の図・机上の文に作者名が記されている）であることから、当年に刊行されたことは揺るがない。また、序文末に「卯のとし日ものびる春」とあるところからも刊年は明確であるが、本作はもともと天明二年に板行される予定であったらしい。棚橋正博氏は『黄表紙総覧　前編』において、松浦史料博物館蔵の天明二年鱗形屋版『八幡黒晒落仙人』の巻末に附された新版目録を紹介している[31]が、そこに「悪抜正直曽我　三冊」と記されているのである。併記された七作品もまた、二年ではなく翌三年板行に延期されたことを考えると、延期は板元鱗形屋の事情によるものであろうと棚橋氏は述べている。

本作は外題に明記される通り、曽我ものの作品であり、春町にとっては『三幅対紫曽我』（安永七年刊）に次ぐ曽我の世界である。その影印・翻刻については、拙稿「黄表紙『悪抜正直

曾我』翻刻と注釈」（『澁谷近世』第二十九号・令和五年三月・國學院大學近世文学会）に備わるので参照していただきたい。

梗概を記す。

河津三郎が討たれた後、工藤に領地を横領された兄弟のことを、鬼王新左衛門だけが残って世話していた。兄十郎は煙草屋伊勢屋の世話で煙草入れの細工をして暮らし、弟箱王丸は箱根の別当に預けられた。箱根の別当は箱王が寺侍にならぬよう、男色を迫り早く山を下りるように仕向けた。ある時箱根を詣でた工藤祐経も、早く下山して侍になるようにと、箱王に中木作りの太刀を授ける。箱王丸は十六歳になって山を下り、元服して五郎時致と名乗る。一方、兄弟の母満江御前は、曽我太郎祐信と婚姻を結ぶ。十郎は祐信から羽織を貰い、大磯の廓へ遊びに出かける。五郎は小林朝比奈らと鎌倉山下の切見世で遊興に耽り、次第に借金がかさんで中木作りの太刀を質に入れるが、質流れしてしまう。五郎は蔵宿を騙して金を借り、和田義盛が大磯で酒盛りをしている処に出向いて太刀を取り返そうとするが、利息分が払えない。蔵宿の返済も滞ると、ついに祐信は兄弟もろとも勘当してしまう。その届のため鎌倉の決断所に来た鬼王は、富士裾野で頼朝が巻狩りを催すことを知る。五月下旬となり、兄弟と鬼王らは狩場に忍び込む。兄弟は鬼王らに両親への形見を託して、曽我へ帰す。一方、頼朝は弱った猪を仁田四郎に狩らせる。兄弟は祐経の寝間に侵入するが、祐経は御教書を兄弟に返し、全てのことは兄弟が立派な武士に育つための仕儀であったと告げる。これらの経緯を大藤内は春町に話して聞かせたのだった。

毎年正月上演を恒例とする曽我狂言や謡曲としてよく知られた『曽我物語』の著名な挿話・場面を取り上げて作を物していることが分かるだろう。本作の趣向は外題に明示されるように、曽我物語の世界に登場する悪役（悪人）をみな変性させ、実は兄弟のことを気遣う正直者（善人）であったとするものである。そのため、最終的に仇討は回避され、兄弟は立派な武士になるという、まことに正月らしいめでたい草双紙として結実する。

さて、本作十二ウ・十三オに「……なんぼほねをおつてもむらさきそがとびいろそがほどにハおちはこぬ」という文が見える。これは、先行する春町の『三幅対紫曽我』や喜三二の『染直（なおしとびいろそが）鳶色曽我』（天明二年刊）ほど上手く滑稽化できなかったという春町の楽屋落ちの言である。そして、それは先行作を意識して本作を執筆したという意味も込められていることは間違いない。春町作品だけでいうと、『三幅対』は「曽我の世界に仮託して実在の人物をあて、巷間話題となった大名の町人的遊興

振りを諷するところに眼目があった」（『黄表紙総覧　前編』一〇六頁）というように、曽我の世界が当世的趣向によって大きく解体していく作品であるのに対して、『悪抜』は曽我の登場人物をへんちき論的に解釈し直す方法で、当世的要素を多く散りばめながらも物語はほぼ原作の通り展開し、当世的に解体することなく、曽我の世界のまま集約していく作品である。

興味深いのは、鱗形屋から板行されたこれら春町と喜三二の曽我もの黄表紙はみな呼応関係が認められるということである。刊行順に並べてみる。

○喜三二『珍献立曽我』（安永六年・鱗形屋孫兵衛）
○春町『三幅対紫曽我』（安永七年・鱗形屋孫兵衛）
○喜三二『染直鳶色曽我』（天明二年・鱗形屋孫兵衛）
○春町『悪抜正直曾我』（天明三年・鱗形屋孫兵衛）

曽我ものの先蹤は喜三二『珍献立曽我』（安永六年刊）で、それに呼応して春町は翌年『三幅対紫曽我』を発表する。そして、更にその春町作品に対して喜三二は『染直鳶色曽我』を出す。「染直」の語は染織用語に托して、春町作品に呼応する形で再びまた曽我ものを物したことを表わしている。そして、本作『悪抜』は作中に『染直』のタイトルを挙げることでもう一度喜三二作品に呼応したことを明示しているのである。

それでは、本作の成立時期について考えてみることにしたい。最初に記したように、本作の刊年が天明三年であることは確かであるが、作中のトピックを検討してみると成立時期は安永期に遡って考えられそうである。

四ウ・五オの場面で、箱王の元服を行う髪結が「こんどの開てふハぜん光寺ほどにハいきますまい。なんだか此ごろハしばいがとんだことさ……」と話す部分に注目したい。前半は開帳の話題、後半は歌舞伎芝居の話題を呟いている。以下、それぞれの内容について考証していくことにする。

まず前半部の「こんどの開てふ（開帳）」だが、記された内容から推測するに、江戸府内で催されたある出開帳が善光寺の出開帳ほどは盛況にはならないだろうという発言であり、春町得意の当世トピックと考えられる。そこで、比留間尚氏の「江戸の開帳年表」を見ると、安永七年六月一日から曽我兄弟ゆかりの開帳が行われていたことを確認できる。[32]『武江年表』安永七年の条を引くと、「〇六月朔日より、御蔵前八幡宮にて、駿州富士裾野曽我八幡宮曽我兄弟の像（現人神）玉渡明神（虎御前也）開帳」とある。[33]そして、それと対比される善光寺の開帳もまた、曾我開帳と同じ安永七年六月に開催されている。『武江年表』にはその様子が詳細に記されている。

○同日（六月朔日）より同七月十七日まで、回向院にて信州善光寺弥陀如来開帳（此の時、開帳繁昌して諸人群れをなす。暁七時頃より棹の先に提灯多くともしつれて、高声に念仏を唱へて参詣する者多し（中略）鬼娘と云へる見せものなど、いづれも見物多く賑ひしとぞ。[34]）

両国回向院で行われた開帳の殷賑のさまを写している。全く同時期に曽我と善光寺の開帳が行われているところから、『悪抜正直曽我』の髪結の言葉はまさに安永七年六月のトピックを指すものと考えてよいだろう。

「こんどの開てふ」が安永七年の出来事とすると、髪結の発言の後半部「此ごろハしばいがとんだこと」も、同年の歌舞伎界の事件・騒動を暗示するものと考えられる。そこで調べると、同年もっとも評判となったのは、五代目市川団十郎と二代目松本幸四郎との確執であったことが『歌舞伎年表』に記されている。[35]そこに引かれる初代中村仲蔵の『秀鶴日記』の文章は二人の確執の詳細を今に伝える資料であるが、要は四代目団十郎の秘蔵弟子であった幸四郎が、五代目団十郎の不倫事件につけこみ、実子高麗蔵に団十郎の名跡を継がせようと密かに画策した、言わば内紛であった。この二人の確執が昂じて、八月二十七・二十八日の両日、中村座の『伊達競阿国戯場』舞台上での大騒動へと結実し、広く巷間へ知られることになった。人気役者同士のトラブルであり、観客において大評判となったらしい。『秀鶴日記』の記事を引く。

……廿七日、舞台にて幸四郎悪事の段々口上にくわしく申候ゆゑ、見物ハ勿論、裏方楽屋の者共あきれ果申候。廿八日又々右の口上を申、舞台に居合候半四郎に向ひ、ヤイおたふく浅岡め、おのれが兄の民部めハ大悪人だとおれがいつたといへ、おたふくめ、と二度まで半四郎に申せしゆゑ、かんしやく持の半四郎、少々色めきみしゆゑ、居合たる宗三郎、モシ親方と支へければ、おのれハ身が方の飯焚め、引こんでうしやうとつきのけ、おたふく此様子を兄へ云つけろといふて、其座を蹴立て引込ければ、楽屋の騒動大方ならず、すぐに打出し、早速太夫元より三升へハ暇の使相立申候[36]

幸四郎が団十郎に対する悪口雑言を吐き散らし、他の役者も巻き込んで楽屋で大騒ぎになったことが綴られている。その結果、団十郎はすぐに中村座を退座したことが立川焉馬著『歌舞妓年代記』にも見えている。[37]春町は、まさに『正直曽我』執筆中に起きた梨園のスキャンダルを暗に匂わせるように記したものと考えられる。このように、安永七年の出来事を取り上げた

トピックが確認されることから、本作は安永七年中に成立したものと考えるのが妥当であるだろう。

また、これらのトピックほど成立時期を限定するものではないが、作中の歌舞伎役者に関する言及が二点あることについても検討を加えておきたい。

○……新車が団三郎といふばをこぢつけよう（八ウ・九オ）

○なんだかあのさむらいは正月やといふしうたんだ（十二ウ・十三オ）

まず前者の「新車」は二代目市川門之助の俳号である。明和から天明期にかけて活躍した当代の人気役者の一人であったという。新車の演じた鬼王団三郎が印象的であったことからの右の発言であるが、彼が団三郎を演じた舞台は、安永期には二回存在した。一回目は安永五年正月森田座の『其兄弟富士姿見』で曽我五郎と壇三郎を、二回目は安永八年正月中村座の『御摂乎曽我』で箱王と団三郎を、それぞれ演じたものである。『悪抜正直曾我』が安永七年成立だとするならば、春町の念頭には「富士姿見」の新車があったのだろう。

後者の「正月や」は、二代目坂田半五郎の屋号である。寛延から天明期まで活躍した人物で、三都実悪の随一と呼ばれた役者であった。彼は上方役者であるが、安永二年から江戸へ下って長い間江戸の舞台に立った。本作中の「正月やといふしうたん」は安永二～七年の間の江戸における狂言を指すと考えられるが、具体的にどの舞台であるのか確定することはできない。しかし、曽我狂言だとすると、安永六年市村座の『常磐春羽衣曽我』における漁師白龍実は三保谷四郎と梶原平三景時（二役）か、安永七年二月市村座の『穐木交高尾曽我』のいばら弾正本名大友常陸之助と亀山蔵人（二役）のいずれかであろうが、限定はできない。毎年の歌舞伎評判記にも実悪や立役、敵役として名が挙げられていることを考えると、控えめに言って、安永期の江戸の観客にとって半五郎はきわめて印象深い下り役者であったと言えるだろう。

こう考えてくると、新たに問題となってくるのは、先にも引いた十二ウ・十三オの「……なんぼほねをおつてもむらさきそがとびいろそがほどにハおちはこぬ」の一節との齟齬である。喜三二作『染直鳶色曽我』が天明二年板行であるとすると、本作の成立は天明二年中でないとおかしいことになるのである。しかし実は、この『鳶色曽我』も、先行研究において安永八年初版説が指摘される作品であった[38]。『黄表紙総覧』においてその諸説を整理して紹介しているが、それらを踏まえた上で棚橋氏は『鳶色曽我』の成立は安永八年頃で、板行が天明二年にず

れ込んだものであろうと述べている。おそらく『正直曽我』も、同様の経緯で板行が延期された末に天明三年に日の目を見たということであろう。だとすると、本作中に見える『鳶色曽我』への言及は、天明三年板行前の内容改変による入木であったと考えられる。天明二年の『鳶色曽我』板行を享けて本作の当該部分に修整が施されたと考えるのが自然ではないか。『正直曽我』には序文（一オ）末の「卯のとし日ものびる春」という天明三年を示す文言の訂正もあることから、板行に当たって板木に手を加えていることは明らかである。

まとめてみると、本作の成立は安永七年中、板行が天明三年正月であるということが指摘できるのである。

おわりに

春町作黄表紙の成立及び刊行の時期について、先行調査・研究が成されているものを整理・紹介しつつ、これまであまり言及の多くなかった『悪抜正直曾我』と『其昔龍神噂』の成立時期に関して詳細に論じた。

改めてこれらを総瞰的に見直してみると、安永四年の初作二作品を別として、無署名作品は、鱗形屋の瓦解に伴う緊急避難的措置として、やや粗雑に作中署名を削られ刊行されたものであった。安永九年『不物好持たが病』、天明元年『無題記』は鱗形屋に配慮して無署名の袋入本として刊行された。

そして、『悪抜正直曾我』も『其昔龍神噂』も、安永六・七年頃には執筆されていたものの、やはり鱗形屋の営業停止による影響で刊行は見送られ、数年後の鱗形屋再開に合わせて刊行する機会を得た作品であった。

取りも直さず、春町作品の成立と刊行時期に関する問題というのは、安永八～九年の春町の活動休止と、それにまつわる諸事情に関連があるということがより明白になったわけである。

注

（1）拙稿「恋川春町の戯作意識と方法」（『日本文学論究』第七十六冊・平成二十九年三月・國學院大學國文學會）を参照のこと。

（2）浜田義一郎「恋川春町　―倉橋家文書および二三の考察」（『国語と国文学』三十六巻八号・昭和三十四年八月）・後に『江戸文藝攷』（昭和六十三年・岩波書店）に収録。

（3）宇田敏彦「春町の『鎌倉太平序』をめぐって」（『近世文芸研究と評論』第十三号・昭和五十二年・早大文学部暉峻研究室）に春町の絵柄・字癖について言及されている。

（4）詳細を記すと『妖怪仕内評判記』は大久保葩雪編「増補青本年表」に

て春町作・画と明記するが、その他の年表類は画のみにとどめている。『腹京師食物合戦』は朝倉無声著『日本小説年表』、同撰『修新日本小説年表』、山崎麓編「日本小説書目年表」において春町画とするが、作・画とまでは断定していない。『甚三紅絹由来』も「日本小説書目年表」にて春町画としている。

(5) 『不物好持たが病』は作者・画工署名こそないが、十五ウの本文中に「……作者と画工こねまぜの金を恋川はる町が（中略）そのまま書しるして……」とあり、春町作・画を明示する。『無題記』は作中に作者・画工を示すものはないが、『御存商売物』（天明二年刊）・『長生見度記』（天明三年刊）ほか数多くの作品において春町作であることを指摘している。

(6) 『國學院雑誌』第一二三巻第一号（令和四年一月・國學院大學）所収。

(7) (2) と同論文。

(8) 宮永啓子「恋川春町の黄表紙に於ける書誌学上の問題」（『国文（お茶の水女子大学国語国文学会）』第十三号・昭和三十五年二月 所収）

(9) 浜田義一郎「『金々先生栄花夢』出版の時期」（『天明文学 ―資料と研究』浜田義一郎編・昭和五十四年・東京堂出版 収録「偶観抄」初出・後に『江戸文藝攷』昭和六十三年・岩波書店）に収録。

(10) 安永八年説は諸年表がみな八年の条に掲載することに拠るが、その根拠は明示されていない。安永九年説は本文に記した通り。天明元年説は宇田敏彦氏による画風の変遷を根拠に批定したもの。

(11) 日本書誌学大系48（1）『黄表紙総覧 前編』（棚橋正博著・昭和六十一年・青裳堂書店）

(12) 日本古典文学全集46『黄表紙 川柳 狂歌』（浜田義一郎ほか校注・昭和四十六年・小学館）

(13) (3) と同論文。

(14) 『日本文学論究』第七十八冊（平成三十一年三月・國學院大學國文學會）所収。

(15) 鈴木暢幸著『江戸時代小説史』（昭和七年・教育研究会）

(16) 森銑三著『黄表紙解題』（昭和四十七年・中央公論社）

(17) 古典文庫214『黄表紙集Ⅰ』（水野稔編・昭和四十四年・古典文庫）

(18) 『鼠璞十種』中巻（昭和五十三年・中央公論社）

(19) 『続燕石十種』第一巻（昭和五十五年・中央公論社）

(20) 『日本庶民生活史料集成』第八巻（原田伴彦ほか編・平成元年・三一書房）

(21) 『大田南畝全集』第十一巻（浜田義一郎ほか編・昭和六十三年・岩波書店）

(22) 中山太郎著『日本盲人史』（昭和九年・昭和書房・後に中山太郎民俗シリーズ9『日本盲人史』（昭和六十年・パルトス社）に収録。

(23) 伊原敏郎著『歌舞伎年表』昭和三十四年・岩波書店

(24) 高木元著『江戸読本の研究』（平成七年・ぺりかん社）

(25) (8) と同論文。

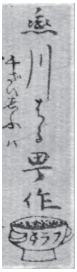
(26) 井上隆明著『喜三二戯作本の研究』（昭和五十一年・三樹書房）

(27) (21) と同書。

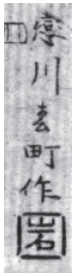
(28) (8) と同論文。

(29) ちなみに天明期の春町作に見られる印記について補記する。印記のあるものだけを拾うと、『我頼人正直』（天明二年刊）には丸に陰陽の印【図版五】。『吉備能日本智恵』（天明四年刊）には四角に岩の字【図版六】。『萬載集著微来歴』（天明四年刊）には高坏図に「フラチ」と書き込まれた印記【図版七】というように、作品ごとに異なる印影を見せている。また、『悦贔屓蝦夷押領』（天明八年刊）・『鎌倉太平序』（天明八年刊）・『鸚鵡返文武二道』（寛政元年刊）はともに盃が描かれた印記【図版八】である。『其昔龍神噂』の印記は天明期のものとは異なり、明らかに安永七年版を指し示していると言えよう。

【図版五『我頼人正直』】



【図版七『萬載集著微来歴』】



【図版六『吉備能日本智恵』】

【図版八『悦贔屓蝦夷押領』】

（30）（9）と同書。
（31）（9）と同書。
（32）『江戸町人の研究』第二巻（西山松之助編・昭和四十八年・吉川弘文館）に収録。
（33）東洋文庫116『増補武江年表Ⅰ』（金子光晴校訂・昭和四十三年・平凡社）
（34）（33）と同書。
（35）（23）と同書。
（36）（23）と同書。
（37）『歌舞妓年代記』（吉田瑛二校訂・大正十五年・宝文館）
（38）（9）と同書。

※論文中に引用した図版は『我頼人正直』と『吉備能日本智恵』は東京都立中央図書館加賀文庫所蔵本、それ以外は全て国立国会図書館所蔵本を用いました。謹んでお礼を申し上げます。